

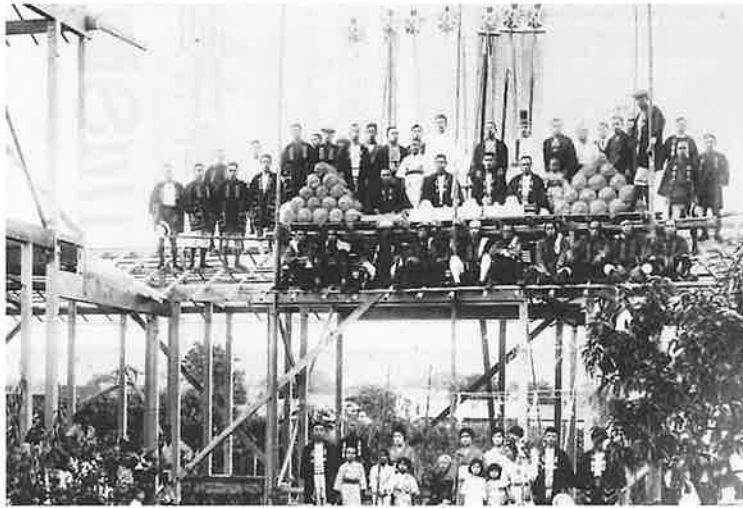
沼津市若山牧水記念館

第20号

1998. 3. 15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11

TEL(0559)62-0424
FAX(0559)62-0424



むねあげの祝ひのもちをわがまくや
千本松原の松の数ほど
牧水

こころ入れて君が造りし此の家に
住みていよく名をしたつべし
喜志子

若山牧水が沼津に定住を決めて、自分の家を建てたのは大正十四年。新築の木の香が匂う家に住んだのはその年の十月五日。前掲の二首は、牧水と喜志子が土肥の大工西川百之助氏に謝礼の意を込めて上棟式の写真二葉を贈ったとき、その写真にそれぞれが書き入れた作品である。

「千本松原の松の数ほど」に手放しの喜びが込められていて微笑ましい。喜志子さんの作品は、慎ましく夫を支える妻の立場から詠んでおり、「こころ入れて」に上棟式に至るまでの牧水の懸念さが描かれ、「住みていよく」名をしたつべし」には「創作」の発行や新しい詩歌雑誌『詩歌時代』への期待が込められ、夫への限りない支援の心が表れている。しかし、ここに至

るまでの牧水と喜志子さんとの間には厳しいものがあつたようだ。もともと、家を建てたいと言いつ出したのは喜志子さんだった。これは、香貫の家に住んだときの差配との軋轢に疲れ、強引な追い出し策に遭つて移転先を見付けるまでの苦勞、さらに、移り住んだ千本の家（新築の家屋でまだ建てかけの状態であつたといわれる。）からも四ヵ月後には再び近くの空き家へ引越しをするなど、借家住まいの煩雜さに辟易した喜志子さんの切実な願ひであつた。牧水には沼津に定着して本来の文学活動展開の足場を築きたいという思いがあり、喜志子さんの願ひを聞く形で家屋の新築に踏み切つたのである。

同年四月十四日の細野春翠への手紙の一節には、「家は、いつのまにか、そこが延び此処がせり出し、途方もないものになりさうです。もともと自分のためでなく、妻子のためにあとに残すのが目的ではじめた事ゆゑ、それもまた悪しからじと陰鬱な心持ちで、どしどし、肯定しつゝ事を進めておます。」と記している。だが、実際には、経費を考へてできるだけ慎重に小さな家と考へる喜志子さんに対して、住居兼仕事場（『創作』と『詩歌時代』の発行所）にしようと思つた牧水とは意見が合う筈はなく、計画は次第にまさに途方もないものになつて、結局、土地四百九十六坪、二階二室、一階九室の建坪七十九坪二合二勺。費用は土地代も含めて二万数千円となつた。当時のサラリーマンの平均給与が月額六十円であつたことからすれば、その金額の大きさも分かる。

地元沼津の御厨銀行の貸付係長倉宜一氏（後の沼津市長）の計らいで借り入れた建築費用は、揮毫会などの集金旅行を繰り返して返済することになるのだが、全国各地から朝鮮にまで及ぶ度重なる旅行が牧水の命を縮めることになつたのである。

『創作』の会員は、揮毫会に絶大な協力を惜しまなかつたが、なかには清貧な牧水こそが魅力と批判的な会員もいて、牧水と喜志子さんの喜びとは逆にいささか齟齬の感を残したともいわれている。

（須永 秀生）

牧水旧居のミニチュアハウス完成

—— 制作者の石川學氏に聞く ——

沼津市若山牧水記念館開館十周年記念事業として企画された牧水旧居のミニチュアハウス(五十分の一の模型)が完成し、昨年十月から展示されています。制作者の石川學さんにお話を伺いました。



ミニチュアハウスを作ることになったきっかけはどういうことだったのでしょうか。

以前から知り合いだった沼津市職員の中島康さんからお電話をいただき、牧水旧居の模型の制作を打診され、匂坂社会教育課長と土屋係長にお会いしました。その後、柴田事務局長を通して沼津牧水会から依頼を受けたのです。

その時点で、これは完全に《建築模型》の世界であり、自分が趣味でやっている《ドールハウス》の世界とは異なるものであると痛感し、柴田氏をドールハウス作品展に案内してドールハウスの世界を見てもらいました。

牧水旧居の模型を見る人に、牧水が愛した千本の風を感じてもらえれば嬉しいと思う反面、趣味で作るのとは訳が違うので、一か月間考えさせていたいただきたいと頼みました。

答えは直ぐに出ましたか。

しばらく悩みました。問題はそう簡単ではないと思ったからです。なぜなら、①資料としては、牧水旧居の「略平面図」一枚と「四方向からの全景写真」のみで、あまりにも少ない。②その住居で生活され

た若山旅人先生は建築家であり、ごまかしがきかない。③牧水についての知識がほとんどない。④時間的猶予がない。などなど。

牧水自身のこの家に対する思いが並々ならぬものであったと

聞いていましたので、

私も自分の手と目で真

剣に見つめていかなければなら

ないと思っ

たのです。

そこで、

図書館に行

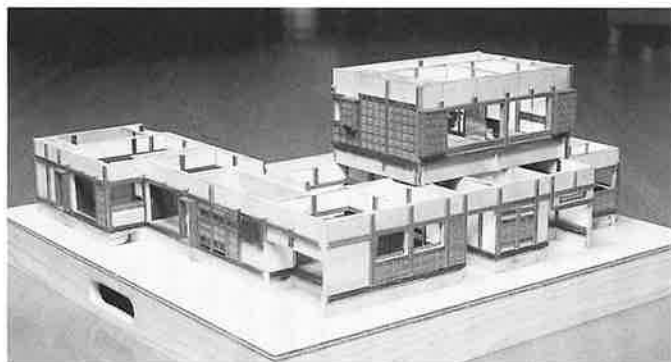
き、牧水に

関係のある

書物を手

にするよう

にもなりました。

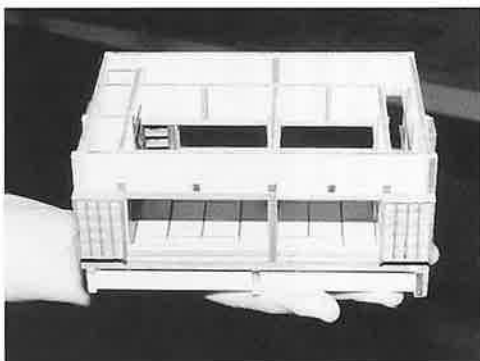


徐々に下準備は進んでいったのですね。

大変だと思いつつも、やってみようという気持ちもありました。そこで、資料に当たるだけではなく、「平面図」からでは分からない柱、壁、建具など立体的なものの意匠的な面と構造的な面とのつり合いをどのようにとるか等、模型の基本構造の分析と検討を始めました。

そこから制作が始まったのですか。
つじつまの合う模型を制作できるかどうか、まず
ボール紙で百分の一の原型模型を作るとともに、模
型の構造について本格的に検討も始めました。

原型模型を作るのに、どのくらい時間がかかりま
したか。



一か月位
でしょうか。
原型模型が
できたところ
で社会教
育課及び沼
津牧水会の
関係者の皆
さんに説明
させていた
だき、皆さ
んから一応
の評価が得
られました。

記念館の開館時から牧水旧居の模型の展示を願っ
ていたという林理事長からの重ねての依頼を受け、
本制作についてのご了承をいただいたので、このま
ま制作に入ることになりました。

ただ、この時点でも不安や迷いがありました。関
係者へのお披露目に続いて、旅人先生を交えた説明
会の場が設けられました。私は旅人先生への約六十
項目の質問を準備しました。

ところが、その場で「青焼きの図面」が見つかつ
たことを初めて知らされ、見せていただきました。

驚いたことにこの図面を見ると、用意していた質問
のほとんどが不要になったのでした。嬉しい反面、
せめてあと三日も早く見つかっていればと残念な思
いでもありました。

しかし、この場で林理事長さんをはじめとする皆
さんが、この旧居の模型の制作を長い間切望されて
いたことを改めて実感し、未知の世界へ踏み出す決
心をしました。

図面と写真のほか参考になさったものはありま
したか。

大正時代の資料を探す中で、NHKテレビの「あ
ぐり」なども参考にしました。ビデオにとって見る



のですが、
筋書きより
も舞台設定
の各建築様
式ばかりが
気になり、
何度も「一
時停止」に
して見てし
まいました。

(笑)

この模型
が、たとえ
一方向から
しか見えな
い場所に置
かれるとし
ても、全方位から眺められても耐えられるように制
作したい。柱、畳、襖、障子等の内部の造作も手を
抜けばわかってしまうだろうから、絶対に手は抜け
ないと思いました。

その後一気に完成へと進んで行つたのですか。

内部の構造はかなり丁寧に作りましたので、屋根
の取り外しができた方が各部屋の中まで分かつてお
もしろい。しかし、可動部分は必ず壊れてしまうの
で固定しなければなりません。そうすると、完成時
には内部がほとんど見えなくなってしまう。そ
こで、一般住宅の建築の場合と同様に、この「建築
工事」に際しても関係者に「中間検査」をしてもら
うことにしました。



若山旅人館長から色紙を贈られる石川學氏

「中間検査」の反応はどうでしたか。

ここが正に勝負の時でした。皆さんが期待しているものが具体的にはまるでわからないのですから。皆さんが抱えているイメージと私のイメージが果たして一致しているのか。たとえイメージは一致していても技術的なものがついていっているのか。

あの時、皆さんが「おう！」と子供のような目でパツと見てくれたことがとても嬉しくて、「これはよし！」と思いましたね。自分が「よし」というよりも、このミニチュアを切望されていた林理事長さん以下の皆さんと私のイメージが合致していることを確認できてほっとした、というのが正直な気持ちでしょうか。

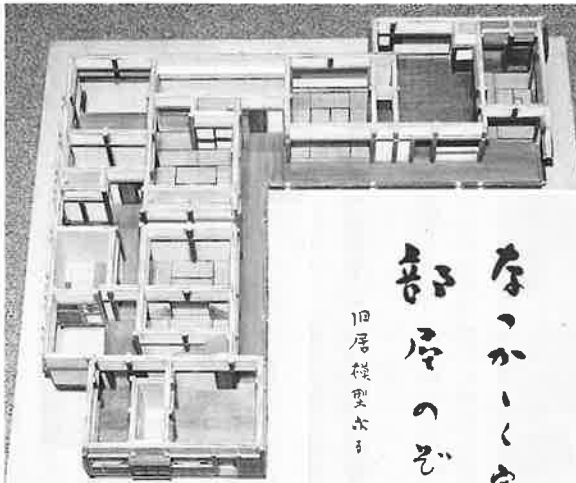
ここから本格的な制作に取り掛かったということですか。

実は、最初の土台を作る段階から最後の棟上げの

ところまでは、もう頭に入れてあるのですよ。あの段階では、もう変更はきかないところまで来ていましたので、これでよかったのだと実感したということとです。

一般の家造りでは棟上げをして屋根を造り、それから内部に移っていくけれども、ちょうど逆の順序になるからですね。

それとおりで。まず一階の畳や襖などをつくり、それから二階をつくり、屋根をかぶせていく、外観だけでなく、内部にあるのだということもぜひ見ていただ



とて父なればか吾
にえ目えきて現ったん
な、かゝく暮りて
吾居のぞい眼の
旅人 鑑

旧居様
石川 学

旅人 鑑

きたいと思いました。先程言ったように、中が見えなくなるのは非常にもつたいないことですが、このミニチュアハウスの性質上仕方ないことでした。

制作にどのくらいの期間を要したのですか。

一昨年の十二月から始めたので、十か月くらいでしょうか。資料がないところから始めたので、ヒントを探し出すのに時間がかかりました。どこにあるかはわからないけれど、希望は持っていました。資料集めに一年くらいはほしかつたですね。

一番苦労した点はどこですか。

一番苦労したのは最初の一か月です。全部のイメージをまず持たなければいけないという点で、「青焼きの図面」が出てきた段階では、かなりの確信がありましたね。質問項目がほぼなくなりましたから。

具体的にどこに苦労したかといえませんが、瓦とか棟とかいろいろありましたが、それらは楽しい苦労でした。

それよりも、皆さんの牧水旧居に対する思い入れを私が形として表すことができ、また、皆さんの作品に対する思い入れと熱意をひしひしと感じることができて本当に幸せでした。

作品が完成したときの率直な感想は？

もつといろいろできたかもしれないという気持ちがありますが、期限内に合ってよかったとまず思いました。記念館開館十周年記念の日である十一月

一日の一月前までには、完成させてほしいと頼まれていましたので。

当記念館の館長である旅人先生は一級建築士でもあります。先生の反応はいかがでしたか。

完成後、旅人先生にご覧いただいたのですが、先生の一言がどういう形で出てくるかが最後の勝負でした。先生は専門家ですから。そして自分が住んでいた家ですから。専門家としての意見と牧水の息子としての意見をぜひ聞きたいと思いました。その旅人先生が「懐かしい」と全身で見てくださいった眼差しが非常に嬉しかった。この出会いがあつてよか



つたと思いましたが。まさか直筆の色紙を頂けるとは思ってもいなかった。これは何よりの喜びでした。旅人先生のところに、ふつと千本の風が吹いたような気がしたのです。

(注・石川さんは、旅人氏からミニチュアハウス制作のお礼として、『亡父なればか吾にも見えて現つなれなつかしく寄りて部屋のぞく眼の』という自作短歌の色紙を贈られた。)

最後にお尋ねします。このミニチュアハウスを見るポイントはどこなところでしょうか。

手仕事というところを見てもらいたい。特に子供たちに見てもらいたいです。沼津のおじさんが、形として何もないところから、いろいろ調べて考えて自分で削ったり練ったりして作った。作る楽しさと素晴らしさを感じてほしい。

牧水が沼津に居を構えた。終の住家として沼津の千本浜を選んだということは、牧水が亡くなった後に沼津で育った私としても非常に嬉しく思います。沼津市民万歳！ですね。

若山牧水が沼津に住んでいたことをご存じない方もいるかと思いますが、牧水が愛した沼津、その町その自然は素晴らしいということを視覚で確認していただきたいと思います。

* * * * *

当記念館を訪れた人々が、石川さんが制作された牧水旧居のミニチュアハウスを鑑賞することにより牧水に対する理解をより一層深めていただけるものと期待しています。本日は、お忙しいところをありがとうございました。



石川 學氏

(有)イシカワ建築設計工務 代表取締役

日本ドールハウス協会主宰

沼津市東原二三九一九

第八回中学生短歌コンクール

作品に見る心のすがた

青木 朝子

平成九年度第八回「中学生短歌コンクール」は、

沼津市若山牧水記念館開館十周年記念の年にふさわしく、千五百十名のみなさんの応募がありました。

平成二年度の百二十七名から始まったこのコンクールは、着実に根をおろしたという感じで、とてもうれしく思います。参加校も回を重ねるごとに増し、

先生方のご指導とご協力で心から感謝申し上げます。

中学生というみずみずしい心の季節に、長い伝統を持つこの優雅な詩形に出逢うことのできた至福をわたしは羨しく思います。なぜならば、川面に落としたひとしずくが幾重にも広がってゆく波紋のように、そののちにもたらすであろう精神生活の限りない豊かさを思うからです。そして、作品に表れる若い日の心のすがたは、かけがえない宝物となるでしょう。



沼津牧水祭碑前祭での表彰

作品を掲げてその有り処を探ってみます。

特選十首

五分前全部うまらぬ解答に頭なやまし顔をしかめる
 朝一番ヒマワリにむけるおはようで私の時間きざみ始める
 大岡中三年 牧野 茜

君が読む本を吾もまた手にとりぬ君に少し少し近づく
 大岡中三年 三谷 彩佳

碁盤の路歩き疲れて「おいでやす」見知らぬ声に心安らぐ
 第三中三年 宮崎 有美

山の中見あげるような大木が私の小ささ感じさせる
 第三中二年 山本 亜希

はすの葉のかけのびたるつぼみあり嵐をよけんとはちを動かす
 第二中二年 林 宏樹

かわいいかにくたらしいかわからない弟の顔うぶ毛が光る
 第二中一年 飯尾 由利

林道を皆歩きし楽しさよ森の木葉はさらさらゆれて
 第四中一年 三村庸一郎

きもだめし見たくもないのに見てしまう自分のうしろの真つ暗な道
 第五中二年 清水 弘基

この夏の稲の成長みとどけて夢に見ている金色の稲
 大平中三年 坂倉 郁子

テストの際の時間ぎりぎりのいらだちを、臨場感あふれることばで表現した田中さん。朝のあいさつはヒマワリへ、そして大切な一日を思うさわやかな

牧野さん。君へのあこがれと思慕を抑えて、少し少

し近づこうとするこよなく愛らしい三谷さん。やわらかな京都ことばに心ほぐして中学生らしい旅情にひたる宮崎さん。大樹の尊厳に触れて自分の小ささを感じるという謙虚な山本さん。いきとし生けるひそやかなものへ寄せるまなざしが、おのずから嵐を前に鉢を動かすという行為へつながる心やさしい林くん。弟への限りないおしみを素朴なことばで見事に具体化した飯尾さん。うれしさを木の葉の揺れに託して弾む思いを手渡してくれる三村くん。きもだめしという遊びの中に心理の動きを垣間見せてくれた清水くん。やがて訪れるみりの秋、稲穂の金色の揺れを夢に見る感性豊かな坂倉さん。

このように学校やくらしの中で出逢うそれぞれの素材を通して、喜び、怒り、あるときは悲しみ、またあるときは悩むさまが率直に表現され、まさに青春の入口の心の弾みが手にとるように感じられるのです。その他の入選作品や、選にはもれたけれど惜しい作品が沢山あって、毎年のことながら選をするのに苦しみました。

このコンクールは中学生生活三年間という限られた時期での応募ですが、どうかそののちもこの感性を大切に、心をやわらかく持ちつづけて欲しいと願うばかりです。

なお、入選の中に片浜中一年生の藤野ダニエラさんの
 雨の日は、水たまりがね、いっぱいね、ピッチピッチと、子どもがならず
 の躍動感あふれる作品がありましたことも今年の大きな収穫のひとつでした。

選者は須永秀生、川口和子、曾根耕一、青木朝子の四名でした。

(社)沼津牧水会理事